

Title	拠点ブランド・デザインの紹介
Sub Title	
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2007
Jtitle	Newsletter Vol.1, (2007. 9) ,p.2- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000001-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いまを自在の翹なからずや¹⁾

グローバル COE は無事発足した。まずは前身の 21 世紀 COE を成功のうちに完了された 21 世紀 COE 拠点リーダーの西村さんの 5 年間の労をねぎらいたい。けだし、21 世紀 COE の成果なしにはグローバル COE の発足は難しかったと思う。21 世紀 COE の申請の時はゼロからの手作りで皆多に消耗したが、今回は 21 世紀 COE の事務局が全面的に協力してくれたので、僕はもっぱら申請書の本文作成に専念することができた。有り難いことである。

目的

本拠点は「論理と感性」の先端的教育研究を、海外の有力な教育研究機関と連携して行うものである。ヒトの判断には論理的アルゴリズムによる合理的判断と感性や情動による直感的判断がある。両者の関係は認識論の古くからの課題であるが、近年の認知科学、神経科学の発展は、判断における論理と感性がひとつの系として、ある時は相互補完的に、ある時は対立的に働いていることを示しつつある。論理や感性のプロセスは必ずしも意識化できる過程ではなく、脳科学的アプローチが必須であり、言語や文化による制約も大きい。本グローバル COE 拠点では、判断における論理と感性の統合を、最も基礎にある生物学的レベルから文化レベルまで、総合的に理解しようとする。

具体的には、1) 論理判断は系統発生的にどのように発生したのか、2) 脳内機構としては論理と感性はどのような系を構成しているか、3) その遺伝と発達的变化はなにか、4) 論理・情報学的には論理と感性の相互作用はどのように表現できるか、5) どのような文化的制約があるのか、という 5 点を明らかにする。論理と感性の解明は分野融合的な研究にならざるをえない。この研究に参加することを通じて実験科学的技法をもった人文研究者、人文科学的な知性を身につけた実験研究者を育成し、国際社会に送り出すことが本拠点の教育的目標である。心の問題は現代社会におけるもっとも緊急に解決しなければならない課題のひとつであり、本拠点はそのような問題の中でも特に重要な論理と感性の協調と対立の解明に対応できる深い知識、幅広い視野、国際レベルの先端的技术を併せ持った研究者を育成するものである。

教育研究体制

論理と感性の教育研究の中心に以下の 5 班からなる「教育研究プログラム」を設置し、国内、海外の連携拠点と密接な共同教育研究を行う。

1) 脳と進化班：チームリーダー 渡辺 茂

2) 遺伝と発達班：チームリーダー 山本淳一

3) 言語と認知班：チームリーダー タンクレディ・クリストファー

4) 哲学・文化人類学班：チームリーダー 宮坂敬三、飯田 隆

5) 論理・情報班：チームリーダー 岡田光弘

これらの教育研究の実施を支えるのが「研究施設」(脳研究施設、動物実験施設など)である。21 世紀 COE では、脳研究のために脳波計、光トポグラフィ(NIRS)、経頭蓋磁気刺激装置(TMS)を導入したが、本拠点のテーマである感性系の研究には皮質下の機能測定が必須であり、現在最強の脳機能画像法である 3 テスラ fMRI を導入する。

グローバル COE の特徴のひとつは若手研究者の育成にある。本拠点では「研究成果発信支援・評価プログラム」を設置し、若手研究者の国外での研究発表の効果的成果発信を支援する。アカデミックライティングの講座、個別論文作成の指導から、海外の第一線で活動するための戦略的指導まで行う。

グローバル COE のもうひとつの特徴は海外研究拠点との連携である。本拠点の教育研究に効果的に連携できる先端的教育研究機関として、現在ケンブリッジ大学、ウイーン大学、ビーレフェルト大学、エコール・ノルマル・シュペリール、パリ大学の 5 つの機関と提携関係を締結しており、そこからは 5 名の研究者が事業推進担当者として本拠点に参加している。これらの研究機関とは 21 世紀 COE の活動を通じてすでに共同研究の実績がある。海外連携拠点と協力して若手研究者が共同研究やセミナーを行う「国際教育研究プログラム」を実施する。さらに、「国内連携拠点」として理化学研究所・脳科学総合研究センターの「象徴概念発達研究」チームから 2 名の研究者が事業推進担当者として参加している。

運営体制

運営は拠点リーダーを中心に、社会学研究科委員長、文学研究科委員長からなる幹事会、その下の「研究施設」、「研究成果発信支援・評価プログラム」、「国際教育研究プログラム」、「広報委員会」、「倫理委員会」、の各責任者からなる拠点運営委員会で行い、各責任者は随時当該部門の委員会を開催する。なお、これとは別に海外の委員を含めた「外部評価委員会」を設ける。

21 世紀 COE では NIRS や TMS を装備したが、今回は MRI を装備する。なにぶん高額な機器であり、これが人文科学の拠点か？と疑問視する声もあるようだが、心ないことである。最新の脳科学の装置を備えた人文系の拠点こそが、新時代の文理融合的な教育研究拠点の姿なのである。その意味で、本拠点は人文科学における新しい時代の先端的教育研究拠点の象徴的存在といっていいたい。

教育拠点にこのような最新設備が必要なのかという意見もある

ようだ。本拠点は学部教育のためのものではない。大学院で最先端の研究をする若手研究者を育成するためには最先端の研究設備での教育が必要なはいうまでもない。fMRIの原理であるBOLD効果の発見に日本人が決定的な役割を果たしているにもかかわらず、脳機能画像による心的機能研究の初期段階で我が国は決定的に遅れをとった。心理学をはじめとして人文、社会科学の研究者がその重要性に気がつかなかったこと、あるいは気がついていても疎外されていたことがその要因のひとつである。しかし、遅れた分、最先端の装備で研究を始めることができる。「MRI

による機能画像は脳の世紀を迎える人類に与えられた最大の贈り物」(中田, 1999)といわれる。本拠点に集う研究者諸君、機械はここにある、さあ存分に翅をひろげ給え。

1) 出典「かたちの子春の子血の子ほの子いまを自在の翅なからずや」(与謝野晶子)

